

第4章

多層的ボーダーに生きる苦悩と光 中露アムール国境への旅を通して

花松泰倫 九州国際大学

1. はじめに

本稿は、中国とロシアのあいだに存在する2つの国境地域への旅を通して見えてくる多層的なボーダーの様態とその影響についてエッセイとしてまとめた小論である(図1)。国境地域に何重にも積み重なる様々な次元のボーダーが、国境地域に生きる人々の暮らしと安定、国家間関係にいかなる影響を及ぼすのか。文献調査だけでは見えてこない国境地域の現場の状況をフィールドワークによって確認しながら、国境地域に存在する多様なボーダーの意味と含意について探る試みである。

「多層的ボーダー」とは聞き慣れない言葉かもしれない。通常、「ボーダー」とは「国境」を意味する。それぞれの国家の領域管轄権の縁辺、または隣り合う国家同士の縁辺の境界を国境と呼ぶことが一般的である。これはいわば国家にとっての「行政境界」と言い換えることもできる。私たちは通常、国家の行政作用が及ぶ領域的限界を「線」として認識し、それを国境(ナショナルボーダー)と呼んでいる。

しかし、ボーダーは本来、このような行政境界に留まらない。一つは、自然環境や地理的要素によって認識される「自然境界」である。河川や海、陸域、および流域など、自然環境や地理を理解するために人間が認識するボーダーが存在する。行政境界とし

ての国境がこのような自然境界と一致するとは必ずしも限らない。

もう一つは、人々の交流やモノの移動、生活圈や経済圏の形成によって認識される「社会的境界」である。伝統的な国際政治学や国際関係論の観点から国家間関係を捉える場合、行政境界としての国境と社会的境界は限りなく一致するという理解ないしは思い込みが存在する。ところが多くの国境地域においては、行政境界としての国境を直接的に跨いだ様々な移動と交流、さらに国境を行き来することを前提とした人々の営みなど、ある種の越境的な社会の存在が認識できる。このような行政境界としての国境と社会的境界のズレを重視する境界研究(ボーダースタディーズ)は、国境そのものを線ではなくエリアとして捉えて境界地域(境域)と呼び、越境的な社会の成立を是認する(ディーナー & ヘーガン 2015)。しかし、常に、いかなる国境地域においても行政境界としての国境と社会的境界がズレる(国境を越えた社会が成立する)とは限らない。

行政境界としての国境、自然境界、社会的境界という3つの多層的ボーダーがどのように構成されているかによって、その国境地域の特色が浮かび上がるのではないかと。本稿は、このような仮説ないしは素朴な問いに対して、旅を通して見たもの、感じたものを手がかりに答えのきっかけを掴もうとするささやかな試みである。

2. 黒河とブラゴヴェシチェンスク、そして江東六十四屯へ

アムール川中流から上流にさしかかる国境地域に、黒河とブラゴヴェシチェンスクがある。前者は中国黒龍江省の中級都市、後者はロシア極東のアムール州の州都である(図2)。両都市とも人口が20万人前後であり、国境となるアムール川を挟んでわずか750mしか離れていないことから、この2つの都市はしばしば“twin city”と呼ばれることがあ



図1 対象地域

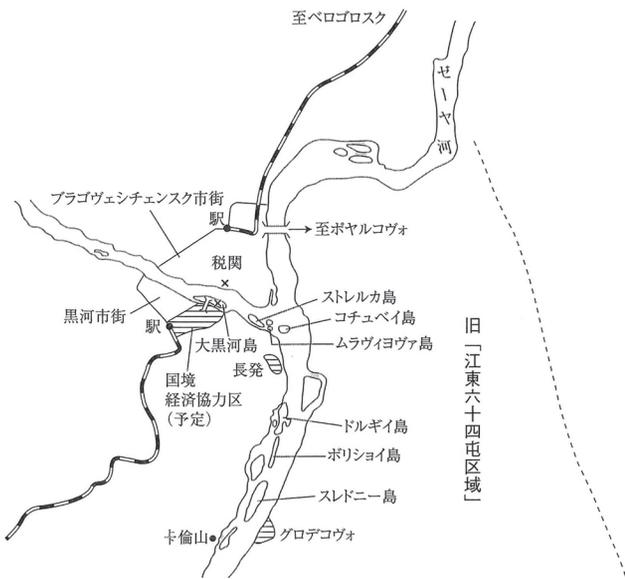


図2 黒河・ブラゴヴェシチェンスク国境

出典：岩下明裕『中・ロ国境 4000 キロ』角川書店、2003年、178頁

る (Mikhailova and Neméth 2019; Mikhailova and Wu 2017)。

この国境地域を私は以前からぜひ一度訪問してみたいと考えていた。一つには、以前から関わってきたアムール川流域の環境保全研究プロジェクトが関係している。「オホーツク海の豊富な漁業資源の源は、アムール川流域からオホーツク海に流れ出る『鉄』に起因する」という仮説を証明する文理融合研究プロジェクトにおいて、政策面での分析と提言をする役割を担ったことがある。アムール川流域内に多く点在する湿地帯に溶け込んだ「鉄」が支流からアムール川本流に、さらにはオホーツク海にまで流出することで植物プランクトンの光合成に寄与するという壮大な生態系の物語を紡ぐ仕事を、文系研究者の立場で支援した (Hanamatsu 2012; 白岩 2011)。その際、アムール川流域の中で最大の湿地帯がブラゴヴェシチェンスク近郊のアムール川とその支流であるゼーヤ川の合流地点近辺に広がっていることを水文学の共同研究者から聞かされていた。その湿地帯をぜひこの目で見てみたいと考えていた。もう一つは、この10年ほど進めているボーダーツーリズム研究のフィールド調査という目的である (花松 2016; 2017)。4000kmにも及ぶ中露国境のなかでも物流や人の動きが許され、かつ活発に行われる国境地域は僅かであるが、その中でも従来からその代表格のひとつとして挙げられる中露国境地域だからである。近年は貨物貿易量や出入国者数の点でもう一

つの代表格である綏芬河・ポグラニチニ国境の後塵を拝しているが、それでも河川国境を跨ぐ人とモノの移動がどの程度のものかを間近に見てみたかった。そして、そのチャンスは2018年秋にやってきた。

NPO 国境地域研究センターのツアーとしてハルビンに前泊した後、空路で黒河に到着した。空港は丘陵地帯の中にあり、そこから下って黒河の市街地に入っていく。逆に市街地から見ると中国領側はアムール川を背にしてほぼ山間地となっていることがわかる。これがいわゆる「小興安嶺山脈」である。そして、この地理的要素がこの国境地域で100年以上前に起きた悲劇の背景にあることに後で気づくことになる。

黒河は綺麗で洗練された街に見えた。高層のビルやマンションが建ち並び、黒龍江省の北東端に位置するこの国境の街にも中国の経済発展の影響が及んでいることがよくわかる。アムール川沿いには花壇などで整備された美しい公園が延々と続き、公園の中心部では多くの地元民や観光客が集まって対岸の目と鼻の先にあるロシア・ブラゴヴェシチェンスクを望んでいる。穏やかに流れる川面には階段で下りられるようになっているが、家族連れが浅い川辺に入って水遊びをしていたり (写真1)、花嫁と新郎と思われるカップルが友人たちと結婚式用の写真撮影をしていて (写真2)、国境にありがちな物騒な雰囲気やイメージは微塵も感じられない。他方で、そのようなどかな風景とコントラストを成すように、川の中央付近にはロシアの国境警備艇がこちらを監視するように停泊していた。そしてさらに、今度は中国の国境警備艇と思われる数隻の軍艦がロシアの国境警備艇とすれ違いながら上流から下流に向けて移動していくのが見えた (写真3)。軍事的な緊張感



写真1 アムール川で水遊びをする親子 (筆者撮影)



写真2 結婚式用写真を取るカップル（筆者撮影）



写真3 アムール川ですれ違うロシアと中国の国境警備艇（筆者撮影）

は感じないものの、それでもやはりここは国境なのだということを実感させられた。

街のなかでは飲食店の看板にロシア語が併記されていたり、ロシアのビールや食料品を売る店も頻繁に目に付いた。夜に立ち寄った居酒屋でもロシア人の男性グループやカップルが大声で歓談をしている。世界のどの国境地域でも見られる風景とあまり違いはなさそうだ。市街地のはずれには1991年に経済貿易区として外貨獲得を目的に設置された商業区域があり、ロシア人向けのショッピングセンター街がある。訪ねてみると巨大な建物がふたつあったが、一つはすでに廃墟となり、もう一つの方も客がまばらで、閑古鳥が鳴いている（写真4）。マトリョーシカなどロシアの物品を売る店員達が暇そうにカード遊びに興じていた。かつての賑わいに陰りが見えていることが窺われるが（岩下 2003）、それでも国境の川を跨いだ人とモノの往来が現在でも日常的に行われていることは間違いなさそうであった。

翌日に船でブラゴヴェシチェンスクに渡る際にもそれは確認できた。わずか5分の国際航路であった



写真4 黒河市内のロシア人向けショッピングセンター（筆者撮影）

が、観光客とともにロシア人の担ぎ屋たちが大きな荷物を抱えて乗り込み、船の甲板に積み上げながら対岸のブラゴヴェシチェンスクに向かっていった（写真5）。この航路にはロシア船と中国船の双方が乗り入れている。船の待合所には多くの中国人もたむろしていたが、我々が乗ったのがロシア船だったせいか、我々以外の乗客はほとんどがロシア人であった（当初は中国船のチケットを購入したが、中国人客の勢いに押されて乗船を逃し、次の中国船を待たずにロシア船のチケットを買い直して乗船した）。この担ぎ屋貿易についてもかつてに比べればその勢いは弱くなっているということのようであるが（岩下 2003）、初見で見渡す限り、少なくともこの国境地域ではアムール川を跨いだ生活圈や経済圏が存在していることは確かなようであった。言い方を変えれば、行政境界としての国境と生活圈や経済圏の形成によって認識される「社会的境界」は一致しておらず、むしろズレている。



写真5 船から降りるロシア人の担ぎ屋たち（筆者撮影）



写真6 建設中の国際横断橋（筆者撮影）

ちなみに、黒河とブラゴヴェシチェンスクを往来するためには、夏場は船で、冬場は凍結するアムール川の上をバスで渡る。他方で、アムール川を挟んでこの二都市を結ぶ国際的な横断橋が訪問当時、建設中であった（写真6）。1995年にはすでに中露政府間で建設協定書が調印されていたが、この20年間の中国の経済発展によりロシア側の「中国脅威論」が高まったせいか、着工は2016年と遅れていた。そして、その後の報道を見る限り、2019年冬にようやく完成し、2020年春の開通が予定されていたが¹、新型コロナウイルス感染拡大による国境封鎖の影響で開通が遅れているという。この橋の開通によって両都市間および両国間の人とモノの往来が今後どのように変化するのか、目が離せない。

ブラゴヴェシチェンスクに渡った翌日、市街地からマイクロバスで支流のゼーヤ川を渡って南下したが、そこには広大な草原と湿地帯が広がっていた（写真7）。しばらく走ると全方位が地平線の彼方まで平地が広がる、日本ではまず見ることのできな



写真7 ゼーヤ川の南に広がる草原湿地帯（筆者撮影）



写真8 ゼーヤ川の南に広がる穀倉地帯（筆者撮影）

い光景が延々と続いていた。そして、所々には水に浸った土地が散在し、湿地状の肥沃な土地であることも窺われた。合流地点においては本流のアムール川よりも川幅の広い支流のゼーヤ川流域からもたらされた水が肥沃な土地を作っていると、かつて水文学の同僚研究者が教えてくれた。ここがまさに筆者が訪れたかった土地である。ここから大量の「鉄」が流れ出ているということなのか。

帰路は往路で通った幹線道路から外れ、アムール川沿いの舗装されていない道路がメインとなるルートを進んだ。日が陰り始めた時間帯ではあったが、地平線の彼方まで穀倉地帯が広がっていることがわかる（写真8）。実はここアムール州はロシア有数の食糧生産基地となっている。その中でも特に大豆の生産高は全ロシア最大の120万トン（ロシア全体の4割）を誇る（菱川 2013）²。この地の農業生産における潜在的可能性は以前から注目されており（ポロネンコ&グレイジク 2019）、近年では日本企業による技術協力が行われる一方で、中国資本と中国人労働者（移民）の流入が新たな「中国脅威論」を生んでいると言われる。しかし逆にいえば、それだけこの地域の土地が農業生産の点で魅力的なものということだろう。実際に訪れることでその魅力の一端に触れることができた。

この土地はかつて、「江東六十四屯」と呼ばれた地域である（写真9）。17世紀末から19世紀中頃にかけてこの地域を含めたアムール川左岸は清国領であった。全盛期を迎えていた清はシベリア東進を狙うロシアと衝突し、1689年のネルチンスク条約締結によってアムール川の下流から中流にかけての左岸を手にする。そしてその後には、満州族を中心とした清国臣民が左岸に渡ったと考えられる。しかし、



写真9 瑯玕歴史陳列館に展示された「江東六十四屯」地図（筆者撮影）

ロシアの勢力拡大と南下政策により、1858年の愛琿条約、それに続く1860年の北京条約によってアムール川左岸はロシアのものとなる。ところが、その際にロシアは、アムール川左岸・ゼーヤ川以南に住んでいた満州族が引き続きその地で居住することを許し、なおかつ、寛大にも清の管轄権を認めたのである。このアムール川左岸（江東）に満州族が農業を営みながら64の村（六十四屯）に分かれて住んでいた一帯が「江東六十四屯」と呼ばれる。そしてまさに、満州族が居住を許されたこの土地の肥沃さゆえに、120年前の悲劇が起き、その後の中露友好にくさびとなって残ることとなってしまった。

1900年に山東省で起きた義和団の乱が波及し、江東六十四屯に居住していた数千から1万の満州族がブラゴヴェシチェンスク市内に住む清国人とともにロシア軍によって大量虐殺される事件が発生した。いわゆる「江東六十四屯事件」である。その後、ロシアは対岸の愛琿にまで進出して虐殺を続け、1907年まで清国側のアムール川右岸を占領することになる。そして、この出来事をきっかけにロシアは江東六十四屯から清国人居住者を一掃し、ブラゴヴェシチェンスクから南のアムール川左岸を完全に掌中に収めることに成功した。

この一部始終を現地で目撃した諜報活動家の石光真清が詳細なレポートを出しているが（石光1978）、歴史の真相は未だ明らかになっていない。ブラゴ



写真10 ブラゴヴェシチェンスク郷土史博物館に展示された江東六十四屯事件のパネル（筆者撮影）

ヴェシチェンスク市内の郷土史博物館の説明では清国側が最初に手を出したことになっている一方で（写真10）、江東六十四屯の対岸に位置する愛琿に建設された愛琿歴史陳列館にその翌日訪れると、これでもかというほどロシア側の蛮行を強調する展示が目についた（写真11）。お互いがお互いを憎しみ合う、現在まで続く両国間、両地域間の相互不信の種となってしまう。

ここで今一度問うべきなのは、愛琿条約と北京条約によってアムール川が両国の国境線となった19世紀半ば以降になっても、なぜ満州族を中心とした清国人が江東六十四屯に引き続き居住を許されたのかということである。この国境地域を実際に訪れてみて改めて感じたのは、アムール川左岸に肥沃な土地が広がっていたこと、それに対して右岸は小興安嶺山脈のふもとにわずかしかな農業に適した土地がないことが決定的に重要ではなかったかということ



写真11 瑯玕歴史陳列館に展示された江東六十四屯事件のパノラマ（筆者撮影）

ある。右岸にいた清国人は生きるために左岸に渡って農地を開拓せざるを得なかった。そのことをロシア側も、少なくとも条約締結当初は看過せざるを得なかったということではないだろうか。歴史的事実の解明は歴史家の仕事に委ねざるを得ないが、現地の地理を間近で見るとそのように感じざるをなかった。

そうであるならば、このように整理できないだろうか。行政境界としての国境と生活圏および経済圏で形成される社会的境界にズレが生じることは多くの国境地域に見られる自然な現象であるが、それは通常、人とモノの絶え間ない移動を前提に成立する。しかし、河川という自然地理的に分かりやすいメルクマールを国境とすること、つまり、ナショナルボーダーと自然地理的ボーダーを一致させたことが、逆にこの悲劇を生んだのではないか。自然地理的に農業に適さない山間地から豊かな平地への人の移住は避けられないにもかかわらず、その境界を流れる河川（アムール川）をナショナルボーダーとしてしまったことが、江東六十四屯事件を引き起こし、両国の相互不信を根強いものにしてしまったのではないか。そもそも現代的な水文学の知見から導かれる「流域」概念と比較してみても、河川そのものを自然地理的ボーダーと捉えることには疑念を拭えないかもしれない。しかし、この江東六十四屯を実際に訪れ、アムール川の右岸と左岸の間に明らかな地理的差異を感じたとき、ナショナルボーダーと自然地理的ボーダーを一致させるという一見分かりやすい線の引き方が常によい結果をもたらすわけではないということは、心に留めておいてよいことに思われた。

3. ハバロフスクと撫遠、そして黒瞎子島へ

ロシアと中国の国境線を跨いで外国人が行き来できる国境ポイントは多くはない。前項で紹介した黒河・ブラゴヴェシチェンスク国境や綏芬河・ポグラニチニ、さらに満州里・ザバイカリスク国境が有名であるが、もう一つ挙げるとすればロシア極東の最大都市であるハバロフスクと中国黒龍江省の地方都市である撫遠の間ということになる（図3）。黒河・ブラゴヴェシチェンスクを訪問した前年の2017年秋、同じくNPO国境地域研究センター主催のツ

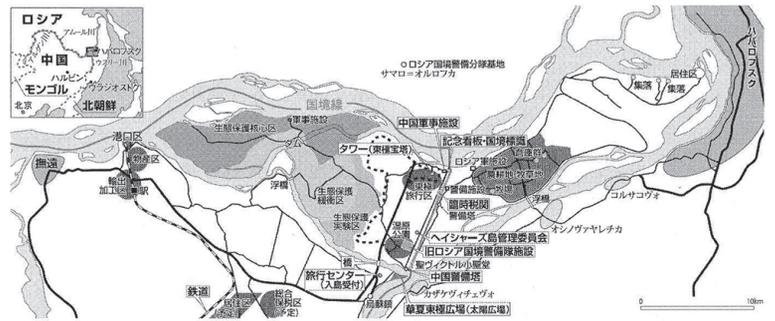


図3 ハバロフスク・撫遠国境と黒瞎子島

出典：岩下明裕「陸のフィフティ・フィフティ——中国とロシアの国境画定」『現代地政学事典』編集委員会編『現代地政学事典』丸善出版、2020年、695頁。

アー参加という形で越境する機会を得た。

ハバロフスクは筆者にとって、何度も訪れたことのあるなじみのある街である。アムール川流域の環境保全研究プロジェクトに参加していた頃には、ハバロフスクで開催された国際会議に招かれたことも度々あった。また、ロシア人と中国人のカウンターパートとともに、ハバロフスクから船でアムール川河口に向けて出発し、約10日間を船上で寝泊まりしながらモニタリング調査と会議を繰り返すという貴重な経験もしていた。さらには、ロシアに特有の暗くて寂しい雰囲気に混じって、どこか明るいヨーロッパ的な雰囲気を感じさせる街並みも気に入っていた。しかし正直に告白すると、その当時、ハバロフスクの対岸が中国であることはもちろん知っていたものの、ハバロフスクから中国側へ船で越境できるということ、またハバロフスクの街の目の前に広がるアムール川の三角州（中洲）が長年に渡る国境係争地であったことをリアルに理解してはいなかった。アムール川からオホーツク海にかけての広範囲に渡る中露の「環境協力」を主に研究していた当時の筆者には、目の前の自然地理や国境を跨ぐ人の移動にそれほど関心がなかったのかもしれない。

それもあってか、何度も訪れたはずのアムール川沿いに広がるムラヴィヨフ・アムールスキー公園の展望台に再び立ったときは驚いた。ハバロフスク市街地からアムール川沿いの目の前に、係争地であった黒瞎子（ハイシャーズ）島（ロシア名はボリショイ・ウスリースキー島）が広がっていたからである（写真12）。この旅の目的は、中露国境紛争の係争地として最後まで残されたこの黒瞎子島にロシア側と中国側の両方から上陸することであった。

中露の国境紛争の種は前項で紹介した1858年の



写真12 ムラヴィヨフ・アムールスキー公園展望台から見るハバロフスク市街地（左）と黒瞎子島（中央から右）
（筆者撮影）

愛琿条約と1860年の北京条約に遡る。アムール川やその支流のウスリー川を始めとした河川の島や中洲の領土帰属に不備があったこと、また2つの不平等条約によって広大な領土を不当にロシアに奪い取られたとする中国側の不満と攻撃的反応も引き金となった。1969年にはウスリー川の小さな島である珍宝島（ダマンスキー島）で軍事衝突が生じ、核戦争への危機も取り沙汰された。その後、解決の機運と失敗を重ねるも、1991年および94年の国境協定により国境画定問題のほとんどは解決したが、アムール川上流のアルゲン川の島であるアバガイド島（ポリショイ島）と並んで最後まで残された係争地が黒瞎子島であった。アムール川の中流域に浮かぶ巨大な中洲であるこの島をロシアが長年実効支配してきたが、1960年代半ばに河川の主要航路を国境線とする一般国際法上の国境画定原則を旧ソ連が受け入れて以降、黒瞎子島の北側または南側のどちらがアムール川の主要航路なのかをめぐって両国は譲らなかった（岩下2003）。ただ、この2島についても2004年に突然合意がなされ、二等分（フィフティ・フィフティ）という画期的方法で国境画定紛争は解決した。この二等分という手法は、日露の国境紛争である北方領土問題に対する解決の糸口としても大いに期待された（岩下2005）。

まずはこの黒瞎子島にロシア側から上陸を試みる。ハバロフスクからウスリー川沿いにバスで1時間ほど走ると、真新しい橋が見えてくる。厳しいチェックもなく橋を渡って草地の中の道路を走るが、途中から砂利道となったため、我々は徒歩で散策した。所々に残る農業や牧畜のための使い古された建物と、



写真13 ロシア側の黒瞎子島（筆者撮影）



写真14 ハバロフスクの客船ターミナル（筆者撮影）

地平線の先のにぞく巨大な塔以外、特に見るべきものがない（写真13）。一時は中露が共同で島全体の観光開発がなされると噂されたこともあったが、上陸して見渡す限りではロシア側に目立った開発の意図は微塵も感じられなかった。

翌朝、ハバロフスクの客船ターミナルから中国の撫遠に向かった（写真14）。高速の小型船で黒瞎子島の北側を航行するわずか1時間半の旅である（図4）。早朝ということもあり待合室にはそれほど客は

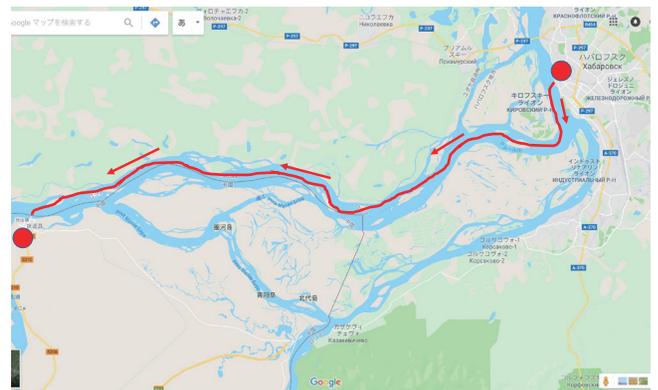


図4 ハバロフスクから撫遠へ



写真 15 ハバロフスクから撫遠に船で向かう乗客
(筆者撮影)

多くはなかったが、我々日本人のほか、ロシア人、中国人併せて 50 人ほどが乗船した。ロシア人と中国人は談笑しながら短いクルーズを楽しんでいる様子だったが(写真 15)、我々日本人だけが船の左側に続く黒瞎子島を食い入るように見つめていた。途中、アムール川の上流域から木材を運んできたと推測される運搬船と何隻かすれ違った後、ロシアの国境警備艇が見えた。二等分された島の間地点にさしかかっていた合図だった。同時に、例の塔も見えてきた(写真 16)。

真新しい建物が構える撫遠の港に着き、入国審査に進むが、我々日本人の団体だけが入国ゲートの前でしばらく足止めを食らった。最終的には理由も分からず通されたが、おそらくハバロフスクから船で撫遠に入る日本人の団体は我々が初めてで、中国側の出入国関係の係官たちも戸惑ったのではない



写真 16 船から見た黒瞎子島(左にロシアの国境警備艇、右に中国の九重の塔)(筆者撮影)



写真 17 撫遠市街地の街並み(筆者撮影)



写真 18 撫遠市街地の中通り(筆者撮影)

か。その後、中国側の旅行会社のガイドが入管の中まで入ってきて出迎えたが、彼の話では、川が凍らない夏場だけ毎日ロシアから 150 人、中国から 500 人が観光やビジネスでこの航路を利用していると言う。中国からハバロフスクへは 2 泊往復で約 15,000 円、かつてから暗黙に行われている風俗サービスは別料金とのことだった。撫遠は人口 20 万に満たない小さな都市ではあるが、ここでも綺麗に整備された市街地に高層マンションが建ち並んでいた(写真 17)。他方で、目抜き通りを一歩中に入ると露天商人達の空間が広がっており、かつて 10 年ほど前まで中国の都市でもよく見かけた活気ある雰囲気を感じられる(写真 18)。もっとも、街中には中国語とキリル文字の両方が併記された飲食店の看板が溢れ(写真 19)、郊外にはロシア人向けの免税品ショッピングセンターもあった(写真 20)。翌年に訪れた黒河・ブラゴヴェシチェンスク国境での人の出入りと比較すると小規模ではあるが、中国の最東端に位置する小さな町でありながらも対岸のハバロフスクとの間で観光交流や経済圏が成立していることが見て取れ



写真 19 撫遠市内の飲食店の看板（筆者撮影）



写真 21 黒瞎子島の「九重の塔」（筆者撮影）



写真 20 撫遠市内のロシア人向け免税品ショッピングセンター（筆者撮影）



写真 22 九重の塔から見た風景（筆者撮影）

た。

昼食を済ませた後、我々はバスで黒瞎子島に上陸した。道路は綺麗に舗装され、見事に観光地化されている。前日にロシア側から入った同じ島の風景とはとても思えないほど、洗練された印象だ。とはいえ、当時、この島は依然として外国人の立ち入りには特別の許可が必要で、旅行会社の計らいでバスには観光局の役人が同乗した。国境紛争をフィフティ・フィフティで解決した友好のシンボルとして全世界にアピールするオープンな観光地とはまだなっていない様子であった。

ハイウェイのような道路をしばらく進むと、前日にロシア側から、またその日の午前中にハバロフスクから撫遠へ向かう船上から眺めた巨大な「九重の塔」が次第に目の前に迫ってきた（写真 21）。階段を高さ 81m の最上階まで駆け上がって見てみると、そこには素晴らしい光景が広がっていた（写真 22）。360 度のパノラマの先にはウスリー川南東のロシアの山並み、さらには 30km 以上離れているは

ずのハバロフスク市街地まで見渡すことができた（写真 23）。景観の素晴らしい一般的な観光名所としても評価することはもちろん可能だが、我々にとっての最大の醍醐味はこの旧国境紛争地の全貌を眼下に見渡すことができた点である。そして、ここで改めて気づくのである。この周辺で国境のメルクマールにしやすい自然地理的特徴が何もないということ



写真 23 九重の塔から見た風景（右手前は中国側歩哨所、奥がハバロフスク市街地）（筆者撮影）



写真 24 国立湿地公園の様子（筆者撮影）

が、九重の塔に登るとよく分かるのである。

考えてみればそれは当たり前のことかもしれない。川の中洲島であるため、平らな土地がただ広がっているだけであることは容易に想像がつく。あえて自然地理的なメルクマールを探し出すとすれば、中洲の両サイドを流れる川の流れだけである。そして、どちらの川の流れが本流かをめぐって中露両国が争ってきたとすれば、解決のためには中洲の島のなかに線を引くしかないということになる。しかし、繰り返しになるが、中洲のなかにも空間を分ける目印となるようなものはなにも存在しない。そうであれば、あとは「自然」に任せるのではなく「人工的」に線を引く以外にないということになるだろう。中洲の島を面積的に二等分する形で中間に直線の国境線を人為的に引いたのは極めて合理的であることが、九重の塔に登ることでリアルに理解できるのである。

さらに注目すべきは、少なくとも黒瞎子島の中国側においては完全な形で観光地化されているという点である。元々は中洲であるため水分を多く含んだ土地であることは想像がつくが、これを敢えて人工的に整地し「国立湿地公園」として運営している点が興味深い（写真24）。また、ロシアとの境界線に近い場所に行くと、越境禁止を促す警告板が至るところで目に入るが（写真25）、その傍らには観光遊覧バスが待機しており（写真26）、国境の緊張感はまったく感じなかった。前方がロシアとの国境線であることは事実ではあろうが、それでもこれは観光客を喜ばすためのアトラクションに過ぎないのではないかという感覚が勝ってしまう。つまり、この地を国境紛争を克服した友好のシンボルとして内外の人々に発信すると同時に、人が定住しない自然環境



写真 25 越境禁止を促す警告板（筆者撮影）



写真 26 観光遊覧バス前で待機する運転手（筆者撮影）

豊かな観光地に作り変えることで、中露間の人工的な「緩衝地帯」とすることが狙いであるように思われる。これは、国境画定に便利な自然地理的なメルクマールが存在しないか、あるいはそれが有効に機能しないことを中露双方が学習した末の知恵であると言えるかも知れない。そして、このような「緩衝地帯」の存在によって中露両国の関係が安定するのであれば、行政境界としての国境（ナショナルボーダー）と自然地理的ボーダーの不一致（ズレ）はむしろ好ましいものだと言うこともできるだろう。

ちなみに他方で、一抹の不安要素もある。撫遠の街に戻って手にした観光地図を広げると、黒瞎子島全体が中国領であるかのように描かれている（図5）。前日にハバロフスクの書店で入手したロシア側の地図が黒瞎子島の二等分国境を正確に表しているのとは対称的である（図6）。中国側の観光地図が中国政府による指示を受けて作られたものなのかどうかは定かではないが、人工的に二等分した国境線は必ずしも「自然」と一致していないために、逆にそれが流動的で不安定なものであるとロシア側に警戒される理由も内包してしまうのかもしれない。



図5 撫遠市内で見た中国語の観光地図

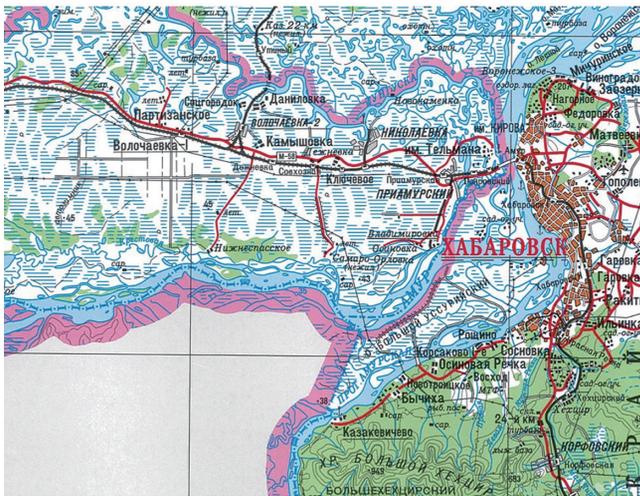


図6 ハバロフスクで入手したロシア語の地図

4. 終わりに

本稿では、行政境界である国境（ナショナルボーダー）、生活圏や経済圏に基づく社会的ボーダー、自然地理的ボーダーの3つの多層的なボーダーが、国境地域でどのように関係づけられ、その結果として国境地域の安定に何をもたらしているのかを、2つの中露国境地域への旅を通してラフにスケッチした。ナショナルボーダーの客観的事実性とは対称的に、社会的ボーダーおよび自然地理的ボーダーの定義が曖昧であること、また近時のコロナウイルス感染症拡大に伴って世界各国で国境を越える人の移動が大幅に制限され、少なくとも短期的にはナショナルボーダーと社会的ボーダーが限りなく一致している現状とその影響をどう捉えるかなど、課題は多く残されている。しかし、多層的なボーダーの方程式が

国境地域の安定と隣国同士の友好関係に何らかの影響を与えることは明らかなように思われる。コロナ感染症の収束を睨みつつ、更なるフィールド調査の積み重ねと方程式の解法の一般化は他日を期したい。

注

- ¹ 産経新聞「中中間の道路橋完成 来春開通、極東で式典」（2019年11月29日）<https://www.sankei.com/photo/daily/news/191129/dly1911290017-n1.html>（2021年3月17日閲覧）
- ² 日本外務省「ロシア連邦アムール州による姉妹都市提携の希望」https://www.mofa.go.jp/mofaj/gaiko/local/page25_001987.html（2021年3月17日閲覧）

参考文献

- 石光真清（1978）『曠野の花：新編・石光真清の手記（二）義和団事件』中公文庫。
- 岩下明裕（2003）『中・ロシア国境4000キロ』角川書店。
- 岩下明裕（2005）『北方領土問題——4でも0でも、2でもなく』中公新書。
- 岩下明裕（2020）「陸のフィフティ・フィフティ——中国とロシアの国境画定」『現代地政学事典』編集委員会編『現代地政学事典』丸善出版、694-695頁。
- 白岩孝行（2011）『魚附林の地球環境学——親潮・オホーツク海を育むアムール川』昭和堂。
- ディーナー、アレクサンダー・C.、ヘーガン、ジョシュア（2015）『境界から世界を見る——ボーダースタディーズ入門』岩波書店。
- 花松泰倫（2016）「対馬・釜山のボーダーツーリズムの展開——境界地域の資源としての国境」『地理』734、古今書院、44-51頁。
- 花松泰倫（2017）「福岡・対馬と釜山をつなぐ」岩下明裕編『ボーダーツーリズム——観光で地域をつくる』北海道大学出版会、35-60頁。
- 菱川奈津子（2013）「ロシア極東：農業開発で販売・技術両面に商機」『ジェットロセンサー』2013年7月号、68-69頁。
- ポロネンコ・アレクサンドル、グレイジク・セルゲイ（2019）「中露協力の過去と未来：ロシア極東の農業に注目して」『ERINA REPORT PLUS』150、52-56頁。
- Hanamatsu, Yasunori (2012) "National Boundaries and the Fragmentation of Governance Systems: Amur-Okhotsk Ecosystem from the Legal and Political Perspective," in Taniguchi, M., Shiraiwa, T. eds., *The Dilemma of Boundaries: Toward a New Concept of Catchment*. Springer, pp. 123-143.
- Mikhailova, Ekaterina (2015) "Border Tourism on the Russian-Chinese Border," *Journal of Siberian Federal University, Humanities & Social Sciences* 3, pp. 437-451.
- Mikhailova, Ekaterina and Wu, Chung-Tong (2017) "Ersatz Twin City Formation? The Case of Blagoveshchensk

and Heihe," *Journal of Borderlands Studies* 32(4), pp. 513-533.

Mikhailova, Ekaterina and Nemeth, Sarolta (2019) "Blagoveshshensk and Heihe: (un)contested twin

cities on the Sino-Russian Border?" in John Garrard and Ekaterina Mikhailova, eds., *Twin Cities: Urban Communities, Borders and Relationships over Time*. Routledge, pp. 288-300.